

W-2 チュルク諸語の副動詞にまつわる諸問題 —節連結・副詞句・複雑述語—

企画者：日高晋介 (日本学術振興会特別研究員 PD/新潟大学)

司会者：アクマタリエワ・ジャクシルク (日本学術振興会特別研究員 RPD/新潟大学)

発表者：菱山湧人 (日本学術振興会特別研究員 PD/新潟大学)、アクマタリエワ・ジャクシルク、菅沼健太郎 (金沢大学)、日高晋介

コメンテーター：江畑冬生 (新潟大学)

企画趣旨

副動詞とは、副詞節を形成する際に用いられる動詞の一形態を指す。Haspelmath and König (1995) 以降、副動詞の通言語的な定義について議論が続いているものの、未だにその定義は確定していない (副動詞の代表的な研究として Van der Auwera 1998, Coupe 2006, Ebert 2008 などが挙げられる)。これは、副詞あるいは従属節の通言語的な定義がそもそも難しいうえ、各言語で副動詞とみなせるものが幅広く用いられていることに起因する。本ワークショップは、副動詞が広く用いられるチュルク諸語に焦点を当て、副動詞にまつわる問題 (節連結・副詞句・複雑述語のいずれか) を取り上げ議論することで、個別言語および言語類型論における副動詞研究に新たな視点を提供することを目的とする。

構成

導入：副動詞の定義と各発表で注目すべき点 (日高晋介) 5分

各発表 各 20分

発表1：チュヴァシ語における条件副動詞の短形と長形 (菱山湧人)

発表2：キルギス語における副動詞の副詞的用法 (アクマタリエワ・ジャクシルク)

発表3：カラチャイ・バルカル語の補助動詞 -(I)b iy-, -(I)b kal-, -(I)b koy- に関する対照研究 (菅沼健太郎)

発表4：中央アジアのチュルク諸語における V-(I)p bol- [V-CVB be-] (日高晋介)

コメンテーターからのコメント (江畑冬生) 10分

会場からの質疑応答 20分

導入及び各発表の要旨

導入：副動詞の定義と各発表で注目すべき点 (日高)：本導入では、各言語の概要について説明し、副動詞の通言語的定義 (Haspelmath 1995, Nedjalkov 1995) とチュルク諸語における定義 (Johanson 1995) 参照してから、江畑 (2023) にしたがって副動詞の用法を節連鎖・副詞句・複雑述語の3つに整理し、各発表で注目すべき点を述べる。

発表1：チュヴァシ語における条件副動詞の短形と長形 (菱山)：チュヴァシ語(チュルク諸語オグル語群)の条件副動詞は2つの形(短形 -sAn と長形 -sAssĀn)を持ち、他の多くのチュルク諸語とは異なり人称接尾辞が付かない。主に継起、条件、仮定を表わすほか、接語と共に用いられて譲歩や願望も表わしうる。本発表では、短形 -sAn と長形 -sAssĀn の異同に着目する。これについてはこれまで十分に研究されておらず、両形式とも同じ意味を表わすとしている先行研究もあれば、両形式に異なる訳をあてている先行研究もある。

本発表では、定量的調査および容認度調査の結果に基づき、長形はほぼ全ての機能において短形と置き換えが可能であるが、長形の出現頻度が全体の約6%と著しく低いこと、一部表現で長形の容認度が低いこと、接続詞的表現や副詞的表現で両形式の頻度に平均からの偏りが見られることを示す。以上の調査結果に基づき本発表では、両形式が完全な自由変異であるとは言えないことを主張する。

発表2：キルギス語における副動詞の副詞的用法 (アクマタリエワ)：本発表では、江畑 (2023) による「節

連鎖」「副詞句」「複雑述語」という副動詞の用法3分類のうち、キルギス語(北西語群)を例に副動詞から成り立つ「副詞句」に着目し、その副詞的な用法について考察を行った。本発表では、キルギス語の-(I)p 継起副動詞と、-A/-y 同時副動詞、-BAy 否定副動詞を考察対象とし、そのデータは Krippes (1998) より副動詞の形式をとる副詞句をすべて収集したものを基にした。その結果、最も多く使用される形の副詞句は-Ip 継起副動詞形で、その次に多いのは-BAy 否定副動詞形、そして最も少ないのは-A/-y 同時副動詞という結果になった。本発表では、まず、副動詞が副詞句として認められる文法的な条件を検証し、次に副動詞の副詞的用法を考察した。最後に、副詞句が形成される動詞の種類に触れ、いずれの副詞句の場合も動作動詞が圧倒的に多いことが明らかになった。なお、-Ip 形と-BAy 形を伴う副詞句の場合、格や他の文の成分と複合的に副詞句を構成しているものがあり、キルギス語の場合、副動詞から成り立った副詞句は様々な役割を果たしていると結論付けた。

発表3：カラチャイ・バルカル語の補助動詞 -(I)b iy-, -(I)b kal-, -(I)b koy- に関する対照研究(菅沼)：カラチャイ・バルカル語はチュルク諸語のうち北西語群に属し、主にコーカサス地方で話されるほか、トルコ共和国の一部地域でも話されている言語である。本発表では Urusbiev (1963: 105-107) でひとまとめに、「予期せぬ非意思的な行動をあらわし、時に瞬時の状態変化をあらわす」とされている同言語の3つの補助動詞 -(I)b iy- “lit. ～て送る”、-(I)b kal- “lit. ～て残る”、-(I)b koy- “lit. ～て放置する”の異同について考察する。そしてこれらの補助動詞がそれぞれ以下の機能をもつことを示す。

- (I)b iy- : 主に意志動詞と共に起し、非意図的な素早い完了を表す。≡知らずに～した。
- (I)b kal- : 主に無意志動詞と共に起し、無意志的な素早い完了を表す。≡自然と～した。
- (I)b koy- : 主に意志動詞、そして一部の無意志動詞と共に起し、意図的な素早い完了または非意図的な素早い完了を表す。この意図性、非意図性は主動詞の意味に依存して決まる。≡わざと～した/知らずに～した。

発表4：中央アジアのチュルク諸語における V-(I)p bol- [V-CVB be-]：トルクメン語(南西語群)、キルギス語、カザフ語(共に北西語群)、ウズベク語、現代ウイグル語(共に南東語群)では、V-(I)p bol- は、動作の完遂を表すが、いくつかの言語ではモダリティの意味も表す。Schönig (1987: 15) は動作的な意味からモダリティの意味が一方向的に生じたとする一方で、Rentzsch (2015: 96) は、モダリティ的な意味は V-GAll bol- の目的副動詞 V-GAll が V-(I)p に置き換えられたことによって生じたとして述べている。先行研究の記述および発表者の聞き取り調査の結果を意味領域地図 (Van der Auwera and Plungian 1998) に照らし合わせると、どの言語も地図の左側に位置する参与者内可能が表せないことが明らかとなった。これは、一方向的に各意味が発展した場合、共時的に各意味が隣接しなければならないという原則に違反している。ただし、動作の完遂とモダリティの意味が別々に発達したと考えれば矛盾がない。以上より、本発表は Schönig (1987: 15) の説ではなく、Rentzsch (2015: 96) による説を支持する。

参考文献(各発表で言及のない文献を挙げる)：Coupe, Alexander R. (2006) *Converbs*. Keith Brown (ed.) *Encyclopedia of languages and linguistics*. [2nd Edition]. vol.3, 145-152. Oxford: Elsevier / Ebert, Karen H. (2008) *Forms and functions of converbs*. Karen H. Ebert, Johanna Mattissen, and Rafael Suter (eds.) *From Siberia to Ethiopia: Converbs from a cross-linguistic perspective*. 7-33. Zürich: Universität Zürich. / Haspelmath, Martin and Ekkehard König (eds.) (1995) *Converbs in cross linguistic perspective*. Berlin/New York: Mouton. / Johanson, Lars. (1995) *On Turkic converb clauses*. Martin Haspelmath and König Ekkehard (eds.) *Converbs in cross-linguistic perspective*. 313-347. Berlin/New York: Mouton. / Van der Auwera, Johan. (1998) *Defining converbs*. Leonid Kulikov and Heinz Vater (eds.) *Typology of verbal categories*. 273-282. Tübingen: Niemeyer.